

事例発表②

「千葉市図書館のサービスについて」

講師：千葉市中央図書館

館長 松尾修一

図書館長になる前は、保育関係の事業課や市長公室に勤務していた。外から図書館を見てきた経験を踏まえると、図書館の評価は来館者数や貸出冊数ではなく、「図書館は良いことをやっている」と周りの皆さんから言ってもらうことが重要である。

1 「親子ふれあい本」事業の紹介

本好きな人を増やすためには、読書習慣が身に付く 10 歳までに本を身近なものにしていかなければいけない。

幼稚園・保育園に図書館の本を提供する「親子ふれあい本」事業では、保護者に本の大切さを伝え、意識を変えてもらうことを目的としている。そのため、保護者と接する保育士や幼稚園教諭に、「絵本はなぜ読み継がれているのか」、「本にはどのような力があるのか」、「選書のポイント」等を研修会で伝えるとともに、保護者にも公民館で同様の研修を行っている。

2 「読み聞かせの達人」事業の紹介

学校に出向き、児童に本の読み聞かせの方法を教え、活躍の場を提供しようと始めた事業である。読み聞かせ検定に合格した児童には、認定書を授与し、「子ども読書まつり」で「達人」として読み聞かせをしてもらった。別の小学校でも始めている。

図書館を利用した経験がなくて図書館を利用しないのであれば、図書館利用を経験させようと、小学生を対象に簡単なレファレンスの授業を今後展開しようかと考えている。小学校の教科書にもレファレンスについて載っているが、中身を見ると勉強のためのもので、興味を持ってもらうことは難しい。自分の知りたいことを挙げてもらい、図書館に来たら知りたいことがわかると思ってもらいたい。「図書館は無料で本を借りられるところ」という認識ではなく、「自分の知らない面白いことを教えてくれるところ」とする文化を築きたい。



(講義中の松尾講師)

3 三省堂書店との協力体制について

図書館を利用していない人に、利用してもらうためには、時間はかかるが本好きな大人を増やしていく、地域に読書の文化を根付かせることだと考えている。

本好きな子供が大人になると図書館にも書店にも行ってくれるから、両者の垣根を越えてやっていこうと考えた。

千葉そごうの三省堂書店に相談し、書店前に図書館の返却本回収ボックスを設置することができた。本の回収ということだけを考えれば、千葉駅に置いた方が良いのかもしれないがそれだと意味がない、書店との協力関係ができることに意味合いがある。

4 花見川区役所内にできる「小さな図書館」の紹介

区役所内に小さな図書館をつくるプロセスとして、いろいろな意見を取り入れた。多少のおしゃべりを OK にし、寝転んで本を読むスペース、ベビーカーが置けるスペース、児童の横で親が読める本、人の視線を気にせず本が読める椅子等の設置していくところである。

これからは、今、図書館を利用していない 40～60 歳代の利用がどんどん増えてくる。新しい図書館で何をやっていこうか考えているが、そういった人たちを放っておく手はない。例えば、男性は余り群れたがらないが趣味を通してはわかり合える。ゴルフや城郭などの趣味を通して、図書館がコミュニティの場所になれるのでは、と考えている。図書館が働きかければ人と人がつながる。

小さな図書館だが、小さいからこそ地域性が出しやすい。新しい図書館の可能性を秘めていると感じている。

